

湘語蔡橋方言の音韻体系

王 振宇

アブストラクト：

本稿は漢語七大方言に属する湘語の下位方言、蔡橋方言の音韻について記述したものである。諸漢語方言のうち、湘語の研究は相対的に遅れている。特に、湘語の辺境地域に対する調査研究が不十分である。本稿の研究対象となる蔡橋方言はそのような地域に位置しており、漢語の古い特徴を多く保持している方言である。筆者はフィールドワークで得られた蔡橋方言のデータに基づき、次のような順序で考察を行った。まず、声母・韻母・声調という3つの音節構成素について、それぞれを音声的に整理したうえ、音韻論的な解釈を行った。そして、通時的な視点から、中古漢音との比較を通して蔡橋方言の音韻特徴を論じた。

キーワード：漢語方言、湘語、蔡橋方言、音韻論、中古音

0. はじめに

本稿は中国湖南省邵陽県蔡橋郷の方言の音韻体系について記述するものである。当方言は漢語七大方言の一つ、湘語に属する（図1参照）。湘語は主に中国湖南省、及び広西省の一部で使われる方言であり、使用人口がおよそ3,438万人である（陈晖, 鲍厚星（2007））。

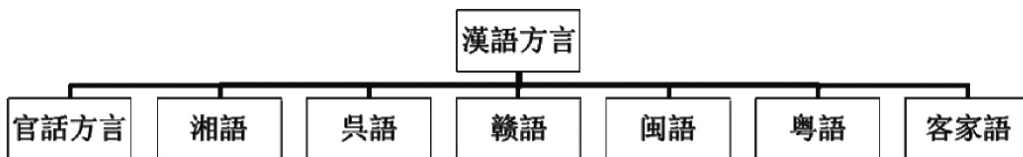


図1 漢語七大方言（詹伯慧編（1991）をもとに筆者作成）

諸漢語方言のうち、湘語の研究は相対的に遅れている。現代言語学理論を用いて湘語を調査したものとして、最も早いのは趙元任、丁声樹などを中心に中央研究院歴史語言研究所が1935年に行った湖南方言の調査である。その後、湖南師範学院の『湖南省漢語方言普查總結報告』（1960）、中嶋幹起の『湘方言調査報告』（1987-1990）などの研究成果が相次いで公表された。とくに1998年～2001年に出版された『湖南方言研究叢書』は9地点の湘語を詳細に記述しており、湘語研究の重要な資料となっている。ところが、これまでの調査、研究は殆ど城関（県の政治・経済の中心）の方言を記述対象としている。一方、辺境地域に位置する県、郷の方言に関する考察は十分に行われていない。湘語は官話方言などの影響を受けて大きく変容した「新湘語」と、古い特徴を多く保持している「老湘語」という2つの新旧層に分けられている。本稿で記述する蔡橋方言は後者に属する。「老湘語」には呉語との共通点が多く残されているとの指摘がある（張光宇（1999））。たとえば、中古全濁声母が有声音として現れること、および蟹摂、仮摂、果摂などの韻母グループの間における連鎖変化である。これらの共通点は高橋萬太郎氏によって唱えられた「吳湘一体論」の論拠となっている。したがって、本稿の

意義は湘語の方言データを増幅することと、漢語方言の類型論的な研究に基礎データを提供することにある。

本稿は次の順序で考察を進める。まず、第1節では蔡橋郷の概況や蔡橋方言の位置づけ、インフォーマント情報について紹介する。次に、第2節では声母・韻母・声調という3つの音節構成素を音声的に整理したうえ、音韻論的な解釈を行う。最後に、第3節では通時的な視点から、中古漢音との比較を通して蔡橋方言の音韻特徴を考察する。

1. 蔡橋郷の概況

蔡橋郷は邵陽県に属する。邵陽県は中国湖南省の西南部にあり、南北距離64.3km、東西距離66.7km、総面積は1996.89平方km、東は邵陽市区、邵東県、祁東県、南は新寧県、東安県、西は武岡市、北は隆回県、新邵県と境を接する^[注1]。『邵陽県統計年鑑・2006』によると、2005年現在の常住人口は976,750人である。蔡橋郷は邵陽県の西部に位置し、西には武岡市、南には新寧県が境界を接する。1950年までは武岡県(現武岡市)惟一郷に属したが、その後、邵陽県の行政区画に入り、1956年に郷治が置かれ、人民公社(1961年蔡橋柘桑公社、1965年蔡橋公社)を経て現在に至っている。2002年現在では21の行政村を有しており、面積は69.92平方km、人口は26,300人である。蔡橋郷の中心産業は農業である。主要農産物として稲、麦、油茶、落花生、唐辛子、ミカン、サトウキビなどが栽培品目となっている。郷内は石炭の埋蔵量が豊富で、多くの採炭場が開設され、郷の主な財政源となっている。近年、郷内の道路整備が進み、各行政村の間は殆ど簡易道路でつながっている。



図2 邵陽県蔡橋郷の位置

邵陽県の方言は鲍厚星・陈晖(2005)によると、湘語の下位グループ、「娄邵片」の「武邵小片」に属する(表1参照)。この下位グループの方言は、次のような音韻的特徴をもっているといわれる。

① 中古全濁入声の一部は有気音もしくは無気音と無声音化されているが、一部は無声音化されてお

- らず、有声音として現れている。これに対し、同じ「娄底片」に入る他の「小片」では、中古全濁入声字はほぼ全部有気音と無声音化されている。
- ② 中古の入声は子音韻尾を落とし独立した声調として現れず、殆ど陽去に合流している。
 - ③ 去声は陰・陽去に分かれており、いずれも上昇のパターンである。調値について、陰去は35か45、陽去は24となっている。
 - ④ 多くの漢語方言では、有聲か無聲かにより、声調の種類が陽・陰調と分かれる。この下位グループの方言では、有・無声だけではなく、有・無気も調類が決まる重要な条件となっている。たとえば、邵陽方言では去声の場合、有気音と有声音が同じ陽去となり、陰去の無気音と対立する。

表1 湘語の下位区画

湘 語															
下 位 区 画	片 ^[註2]	長益片			娄底片					衡州片		辰溆片		永全片	
	小 片	長 株 潭 小 片	益 沅 小 片	岳 陽 小 片	湘 双 小 片	涟 梅 小 片	新 化 小 片	武 邵 小 片	绥 会 小 片	衡 陽 小 片	衡 山 小 片			東 祁 小 片	道 江 小 片

(出所：鮑厚星・陳暉 (2005) をもとに作成)

邵陽県方言に関する文献資料はいまのところ非常に少ない。概説的なものとして『邵陽県志』(1993)がある。同書の「第二十五編 方言」(pp.587-606)という章で邵陽県方言の記述が行われている。対象とする方言は県城(県役所の所在地)の方言を主とし、他の県内方言との差異についても述べてある。ただし、いくつかの特徴を挙げるに留まり、体系的な記述研究はなされていない。このように未開拓の点が多く残された邵陽県方言を、体系的に記述するために、筆者は2006年から、7回にわたって邵陽県の各鎮・郷に赴き、方言調査を行ってきた。そのうち、蔡橋方言の調査が2007年8月から9月にかけて行われた(調査の詳細は王振宇(2009)参照)。本論文に使用された蔡橋方言のデータはすべてこの調査で得られたものである。インフォーマントの情報は次のとおりである。

表2 蔡橋方言のインフォーマント情報

記号	年齢	出身	外出歴	職業	教育程度	話せる言語
WSD	52歳	蔡橋郷	長期外出歴なし	小学校教員	高校	蔡橋方言・標準語

2. 蔡橋方言の声母・韻母・声調

中国語の音節構造については、IMVF/Tを用いて説明することが多い。I (Initial) は声母、M (Medial) は介音、V (Principal Vowel) は主母音、F (Final) は韻尾、T (Tone) は音節全体にかかる声調をあらわす。またVFをまとめて韻基と呼ぶこともある。これらを図式で表すと次のようになる。

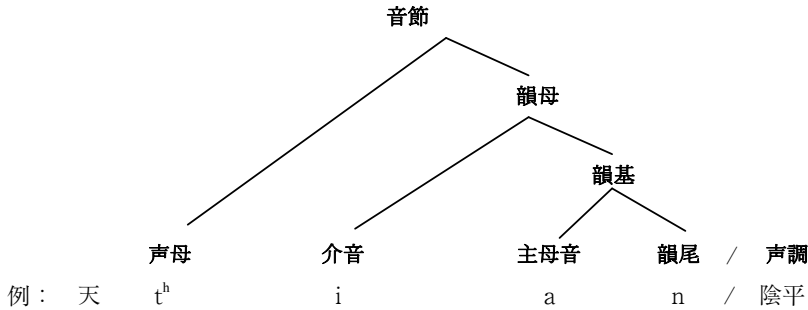


図3 中国語の音節構造

本節では、蔡橋方言の声母、韻母、声調を音声的に整理したうえ、相互の配合関係を考慮しながら、それぞれに対する音韻論的な解釈を行う。

2. 1 声母

蔡橋方言の声母は音声的に、表3のような33種類があると観察することができる。

表3 蔡橋方言の声母

	唇音	舌尖音	舌端音	舌面音	そり舌音	舌根音
破裂音	p, p ^h , b	t, t ^h , d				k, k ^h , g
摩擦音	f, v		s, z	ç, ʒ	ʃ, ʒ	x, ɣ
破擦音			ts, ts ^h , dz	tç, tç ^h , dʒ	tʃ, tʃ ^h , dʒ	
鼻音	m	n		ɲ		ŋ
接近音		l				

1) 調音方法について

まず、声母の調音法について見る。蔡橋方言の破裂音、破擦音には、[p, p^h, b], [t, t^h, d], [k, k^h, g], [ts, ts^h, dz], [tç, tç^h, dʒ], [tʃ, tʃ^h, dʒ] のような無声無気音、無声有気音、有声音という3項対立が観察されている。ただし、この3項対立を成している破裂音・破擦音を音韻論的に解釈する場合、当然声調の要素を考慮に入れねばならない。蔡橋方言には陰平、陽平、陰去、陽去、上声という5つの声調がある。そのうち、陽平には有声音、陰去には無声無気音しか現れず、いずれも調音法の対立を有しない。一方、陰平と陽去にはそれぞれ無声無気音・無声有気音、無声有気音・有声音といった2項対立が成り立っている。これらに対し、調音法の3項対立を持っているのは上声の場合に限られている(表4参照)。

表4 蔡橋方言における調音法の対立と声調の関係

	無声無気音	無声有気音	有声音
陰平		+	-
陽平		-	+
陰去	+		-
陽去	-		+
上声			+

(「+」は当該の声調における調音法が存在すること、「-」はそれが存在しないことを表す)

ここでは、上声における調音法の3項対立の例字を少しばかり挙げておく。

表5 上声における無声無気音、無声有気音、有声無気音の対立

無声無気音	無声有気音	有声無気音
[pi ³¹] (比)	[p ^h i ³¹] (痞)	[bi ³¹] (被)
[tā ³¹] (胆)	[t ^h a ³¹] (坦)	[dā ³¹] (淡)
[k ^h o ³¹] (果)	[k ^h o ³¹] (可)	[g ^h o ³¹] (我)
[tsa ³¹] (宰)	[t ^h a ³¹] (採)	[dza ³¹] (在)
[tsɿ ³¹] (煮)	[t ^h sɿ ³¹] (処)	[dzɿ ³¹] (竖)
[tɕi ³¹] (幾)	[t ^h ɕi ³¹] (起)	[dɕi ³¹] (倚 _{站立})

2) 舌尖音・舌根音・舌面音

この3つの声母グループと韻母との共起関係を表に示すと、表6のようになる。舌尖音と舌根音はいずれも直音韻母と拗音韻母の双方に現れるが、一方、舌面音は拗音韻母にしか現れることができない。こうして、舌面音は舌根音または舌尖音と重なり合っているため、3つの声母グループをそれぞれ異なった音素と認めざるを得ない。

表6 舌尖音・舌根音・舌面音と直音韻母・拗音韻母の結合関係

	舌尖音	舌根音	舌面音
	[t, t ^h , s, z, ʅ]	[k, k ^h , g, x, v, ŋ]	[tɕ, tɕ ^h , ɕ, z, ʅ]
直音韻母	捉, 搓, 锁, 自, 座	哥, 课, 我, 喝, 河, 饿	/
拗音韻母	挤, 七, 息, 柔, 齐	狗, 口, /, 吼, 猴, 呕	鸡, 气, 希, 姨, 奇

(結合関係がある場合は例字を挙げる。結合関係がない場合は「/」で示す。)

3) そり舌音について

蔡橋方言にはそり舌音の声母グループ、[ts, ts^h, s, z, dz]もある。これらの声母は[ɿ]の前にしか現れず、他韻母と結合することができない。一方、舌面音声母[tɕ, tɕ^h, ɕ, z, ʅ]は母音[i, y]の前にのみ現れ、[ɿ]の前に現れない。こうして、そり舌音と舌面音は補い合う関係を成しているため、別個に音素記号を使わず、同じ音素のグループ/tɕ, tɕ^h, ɕ, z, ʅ/として捉えることにする。

4) 鼻音声母について

音節頭に立ちうる鼻音系の子音は[m, ɱ, n, ŋ]の4つである。このうち、[m ɱ]をそれぞれ音素/m ɱ/として捉える。[ɱ]は拗音韻母(狭母音[i, y])が後続する場合にしか現れず、[n]は直音韻母にだけ先行する。したがって、[ɱ]と[n]は同じ音素/n/と統一されることができる。そして、[n]は後続韻母が広母音の場合、接近音[l]と発音されても意味の違いをもたらさない。つまり、[n]と[l]は自由異音の関係にある。接近音[l]は①舌尖を上の歯茎につけ、②気流が舌の両側を通っていく調音特徴があり、①において[n]と共通しているため、自由異音が起り得たと考えられる。

表7 蔡橋方言における鼻音声母と韻母の関係

	m	ɱ	ɱ	n
直音韻母	+	+	-	+
拗音韻母	+	+	+	-

以上、蔡橋方言の声母をなす子音音素は / p, p^h, b, m, t, t^h, d, n, l, f, v, tɕ, tɕ^h, ɕ, z, ʈ, ts, ts^h, s, z, ʈ, k, k^h, g, x, v, ŋ / の27種類にまとめることができる。

2.2 韻母

蔡橋方言の韻母は音声的に、次のようなものが観察されている。

表8 蔡橋方言の韻母

	開口呼	齊齒呼	合口呼	撮口呼
韻尾なし	ɿ	i	u	y
	ɿ̚			
	i			
	a		ua	
	a	ia	ua	
	e	ie		ye
韻尾-i,-u	ɔ	iɔ		
	ei	iei	uei	yei
鼻化韻	əu	iəu		
		ī		
	ā		ū	
-ŋ 韻尾	aŋ	iaŋ		
	əŋ	iəŋ		

1) 狭母音

まず、狭母音について見る。[ɯ]は奥舌性の狭母音 [u] の非円唇音である。蔡橋方言では別に円唇性の狭母音 [u] が存在するわけではないため、[ɯ] を音素 /u/ と解釈することができる。そして、前舌性の狭母音には [i, y, ɿ, ɿ̚] といった4つがである。[ɿ̚] については後述するが、[i, y, ɿ] は次のように最小対をなしているため、それぞれを別音素と考えるべきである。

表9 蔡橋方言における狭母音の対立関係

[i]	[y]	[ɿ]
[tsi ³¹] 姊	[tɕy ³¹] 走	[tsɿ ³¹] 紫
[ts ^h i ⁴⁴] 妻	[ts ^h y ⁴⁴] 抽	[ts ^h ɿ ⁴⁴] 疵
[si ⁴⁴] 西	[sy ⁴⁴] 修	[sɿ ⁴⁴] 丝
[ɕi ¹¹] 齊	[ɕy ¹¹] 愁	[ɕɿ ¹¹] 磁

この3つの母音は舌の調音部位により、舌面音 [i,y] と舌端音 [ɿ] に分けられる。前者は唇の丸めの有無により、平唇性の [i] と円唇性の [y] が分かれているが、それぞれ /i/, 複合音素 /i̯u/ として捉えられる。そして、舌端音 [ɿ] は舌尖音の後ろにのみ現れ、舌の位置が子音の形を保ちながら、中舌寄りの母音である。この [ɿ] は音素 /i/ に該当する。また、[ɿ̚] がそり舌音の後ろにのみ現れるのに対して、他の3つはそり舌音の後ろに現れない。したがって、[ɿ̚] は他の3つのいずれかとも同一のものと認められる可能性がある。[ɿ̚] は舌端を硬口蓋にもちあげたやや中舌よりの音であるため、調音特徴が相対的に近い [ɿ] と同じ音素 /i/ とする。

2) 半狭母音

まず、前舌の半狭母音 [e] を音素 /e/ とする。そして、中舌性のあいまいな母音 [ə] は韻母 [əu]

〔iəu〕〕〔ə〕〔iəu〕に現れている。〔əu〕〔iəu〕の〔ə〕は〔a〕の弱化と考えられ、〔au〕という韻母も存在しないため、/a/と解釈することができる。一方、〔əŋ〕〔iəŋ〕における〔ə〕は〔u〕の弱化と考えられ、音素 /u/ と捉える。最後に、奥舌の半狭母音には〔ɔ〕がある。〔ɔ〕は開口の広さが〔o〕と〔u〕の間にあり、円唇性の母音である。蔡橋方言には円唇性の〔o〕が存在しないため、〔ɔ〕を音素 /o/ とする。

3) 広母音

北京語音系においては、広母音〔a〕と〔ɑ〕は相補的な関係にあり、音素 /a/ に統一されている。これに対して、蔡橋方言では、〔a〕と〔ɑ〕は単母音、もしくは介音〔u〕の場合、意味の対立をなしている。したがって、両者は別個の音素 /a/、/ɑ/ とせざるを得ない。ただし、そのほかの音声環境(-i介音や鼻音韻尾など)では〔a〕と〔ɑ〕が互いに対立的な関係を成していない(表10参照、括弧内は例字)。

表10 蔡橋方言における広母音〔a〕と〔ɑ〕の関係

音声環境	〔a〕	〔ɑ〕	音韻対立の有無
単母音	[da ¹³] (代) [p ^h a ¹³] (派) [ka ²⁴] (盖)	[da ¹³] (大) [p ^h ɑ ¹³] (怕) [ka ²⁴] (嫁)	対立あり
〔u-〕	[yua ¹³] (坏) [kua ³¹] (拐)	[yua ¹³] (画) [kua ³¹] (寡)	あり
〔i-〕	-	[ia ³¹] (野) [cia ²⁴] (石) [pia ⁴⁴] (壁)	対立なし
〔-ŋ〕	-	[kaŋ ⁴⁴] (江), [tɕiaŋ ⁴⁴] (姜)	なし
鼻母音	[kɑ ⁴⁴] (干), [pɑ ⁴⁴] (班)	-	

4) 介音

声母と韻母〔a〕〔ɑ〕〔ɔ〕〔e〕との間には、わたり音〔i〕、〔u〕、〔y〕が観察されており、〔ia〕〔iu〕〔ie〕〔iei〕〔ua〕〔ua〕〔uei〕〔ye〕〔yei〕などの韻母が作り上げられている。わたり音〔i〕、〔u〕、〔y〕はそれぞれ /i/、/u/、/y/ に該当すると解釈できる。

5) 韻尾

まず、蔡橋方言の母音韻尾には〔i〕〔u〕がある。それぞれを音素 /i/、/u/ と捉えられる。次に、鼻音韻尾について考察する。音節末に立ちうる鼻音は〔ŋ〕のみである。さらに、[ã] [ɛ̃] [ĩ]のような形として現れる鼻化母音もある。鼻化母音は発音の際、口腔内で封鎖が作られず、気流が口腔と鼻腔の両方を通るという調音特徴を持っている。この点では気流が鼻腔だけを通る〔ŋ〕の調音と異なっているが、舌を上歯茎にくっつけない点では両者が共通している。そして、音声環境をみると、〔ŋ〕は〔a〕〔ə〕の後ろにしか現れず、鼻化要素〔~〕は母音〔a〕〔u〕〔i〕にだけ現れるため、〔ŋ〕と〔~〕を同一音素 /ŋ/ の異音と解釈することができる。こうして、蔡橋方言の有尾韻は { i , u : ŋ } のような対の体系をなしている。

以上、蔡橋方言の母音音素は / a, ɑ, o, i, i, u, e, ɪu / の8個にまとめることができる。蔡橋方言の核母音を図に示すと次のとおりである。

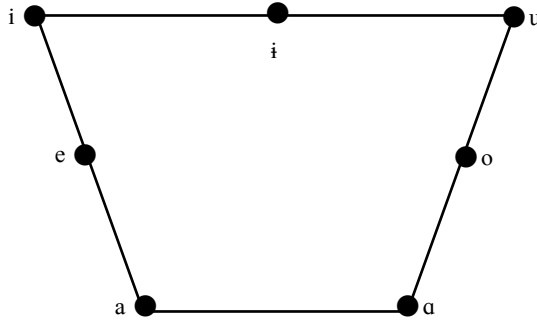


図4 蔡橋方言の核母音図

2.3 声調

声調の調値は五度式で示される。数字の1, 2, 3, 4, 5はそれぞれ「低・半低・中・半高・高」を表す。「pi²⁴」のように、各音節の右肩に表記する。蔡橋方言の単音節声調は5つある。

表11 蔡橋方言の声調

調類	陰平	陽平	上声	陰去	陽去
調値	44	11	31	24	13

蔡橋方言の声母と声調との結合関係は表12のとおりである。

表12 蔡橋方言の声母と声調の結合関係

蔡橋方言の子音		陰平	陽平	上声	陰去	陽去
無気	p, t, tʰ, tʂ, k, f, s, ʃ, z	+	-	+	+	-
有気	p ^h , t ^h , tʂ ^h , k ^h	+	-	+	-	+
有声	b, d, ɗ, g, ɗ, dz, v, x, z, z	-	+	+	-	+
鼻音	m, n, ŋ, ŋ, l	+	+	+	+	-

このように、上声では陰調と陽調が合流している。一方、去声では、陰調と陽調が相補分布をなしている。声調の分流は頭子音の調音方法により決められる。すなわち、無気音子音と鼻音子音の場合では陰去となり、有気音子音と有聲音子音の場合は陽去となっている。

そして、陰平と陽平はほぼ頭子音の無声・有聲によって、相補関係をなしているが、鼻音子音の場合だけ、音韻的な対立を成している。

蔡橋方言の声調の分流、つまり、陰平と陰去、陰平と陽平の対立を決める基準が互いに異なっているため、これらの声調をそれぞれ異なった声調素と解釈する。つまり、蔡橋方言の声調素は / 陰平 /、/ 陽平 /、/ 上声 /、/ 陰去 /、/ 陽去 / という5つがある。

以上、蔡橋方言の声母、韻母、声調といった3つの音節要素を体系的に考察した。次節では、通時的な視点から、中古漢音から今日の蔡橋方音への変化を考察し、蔡橋方言の音韻特徴をより一層明ら

かにする。

3. 中古音との比較

本節では、中古漢音との比較を通じて、蔡橋方言の音韻特徴を考察する。現代の漢語方言は一般的に、中古漢語から分裂してきたものであると想定されている。中古漢語を基準軸にし、現代の諸方言との比較を行うことによって、各方言の特徴を明らかにすることができると同時に、諸方言の間の相違点と共通点を明らかにすることもできる。中古漢語は歴史的区分から言うと、大抵六朝から唐の時代まで、すなわち6～10世紀の漢語をさす。中古漢語の音韻の枠組みをよく反映している資料には、北宋時代の韻書『広韻』（1008）がある^[注3]。以下各節では、『広韻』における中古音の枠組みを示したうえで、それと現代蔡橋方言の対応関係をみる。ただし、紙面上の都合で、一部の特徴のみを提示することにとどめる。

3. 1 声母の変化

中古の子音については「36字母」（36個の声母）という伝統的な中国名が用いられている。本論文は表13のような40種の声母を認め、従来の36字母とは次のようなところで相違している。1つは、本稿は「照組」を「庄組」（庄母*ʃ、初母*ʃʰ、生母*ʃ、崇母*ʃʰ）と「章組」（「章母*ʃ、昌母*ʃʰ、書母*ʃ、船母*ʃʰ」）に分けているという点である。もう1つは、娘母（*n̥）と泥母（*n）が補い合う分布をなしていると考えられるため、前者を後者に併せた、という点である。さらに、『切韻』では「喻母」が「雲母」、「余母（以母）」に分けられているが、王力（1980）などが雲母を匣母に合わせた。蔡橋方言において雲母が余母とも近いという関係から、ここでは雲母と匣母を分ける立場をとる。雲母の推定音価は河野（1979）によるものである。

表13 中古音の声母

声母				グループ分け (調音部位が基準)	
全清	次清	全濁	次濁		
幫母 *p	滂母 *pʰ	並母 *bʰ	明母 *m	幫組	幫系
非母 *f	敷母 *fʰ	奉母 *v	微母 *ɱ	非組	
端母 *t	透母 *tʰ	定母 *dʰ		端組	端系
精母 *tʃ、心母 *s	清母 *tʃʰ	從母 *ʈʰ、邪母 *z		精組	
			泥母 *n 來母 *l	泥組	
知母 *tʃ	徹母 *tʃʰ	澄母 *dʰ		知組	知系
庄母 *ʃ、生母 *ʃ	初母 *ʃʰ	崇母 *ʃʰ		庄組	
章母 *ʃ、書母 *ʃ	昌母 *ʃʰ	船母 *ʃʰ、禪母 *z		章組	
			日母 *nz	日組	見系
見母 *k	溪母 *kʰ	群母 *gʰ	疑母 *ŋ	見組	
曉母 *x		匣母 *ɣ		曉組	
影母 *ʔ			雲母 *ɦ 余母 *j	影組	

蔡橋方言の子音が中古漢語から今日までに遂げた変化の中には、次のような大きな特徴が観察される。

- ① 中古の全濁声母（有声音）は蔡橋方言において、古平声・上声・去声の場合、殆ど有声音として現れている。一方、古入声の場合、一部分だけが有声音として現れているが、大部分は有気の無声音子音となっている。
- ② 中古の舌尖音系列（精組（*t,*tʰ,*s,*z,*ʈʰ）、端組（*t,*tʰ,*dʰ）、泥母（*n））の子音は殆ど舌尖音として現れている。
- ③ 中古の舌面音系列（知組（*t,*tʰ,*dʰ）、庄組（*tʃ,*tʃʰ,*dʒ）、章組（*tʃ,*tʃʰ,*dʒ,*tʃʰ,*z））のうち、知組子音は二等韻母の場合、庄組子音と同じ変化を遂げて舌尖音となったが、三等韻母では章組子音と合流して、舌面音、そり舌音、舌尖音という3種類として現れている。中古の舌根音・咽頭音系列の子音（見系（*k,*kʰ,*g,*x,*ŋ））では、口蓋化が起きて知組_{三等}、章組子音と合流して舌根音、舌面音、そり舌音として現れている。

以下、調音方法について1点（3.1.1）、調音位置について3点（3.1.2～3.1.4）をそれぞれ取り上げて論じる。

3. 1. 1 有声音子音の保持

中古音の全濁声母は次のような11個があり、いずれも有声音子音と推定される。中古の有声音子音は今日、北京語をはじめ、ほとんどの漢語方言で無声音化されている。一方、一部の湘方言と呉方言には有声音子音がなお保たれている。蔡橋方言では、中古全濁声母の大部分が有声音子音として現れている（表14参照）。

表14 中古全濁声母と蔡橋方言子音の対応関係

中古音の全濁声母		蔡橋方言	
字母	推定音価	大部分の発音	一部分の発音
並母	*b ^h	b	p ^h , p
奉母	*v	v	f
定母	*d ^h	d	t ^h , t
從母	*ʈ ^h	ʈ	z, ts ^h , ts
邪母	*z	ʈ	z, s
澄母	*d ^h	ʈ	dz, ts ^h
崇母	*ʈ ^h	ʈ	z
船母	*ʈ ^h	ʈ	z
禪母	*z	ʈ	z, dz, ɕ
群母	*g ^h	ʈ	dz, g, t ^h
匣母	*ɣ	ɣ	v, x, ɕ

また、中古全濁声母は蔡橋方言で無声音化されて、無声音の子音として現れることもある。それは中古声調の舒促（舒声^[注4]か入声か）と関係している。すなわち、全濁声母は中古音で舒声の場合、今日の蔡橋方言でほとんど有声音として現れるが、一方、中古音で入声の場合、無声音として現れることが多い。その原因は、入声は内破音韻尾-p, -t, -kでおわる特有の声調であるので、頭子音が無声音の音節末子音に同化されやすいからであると考えられる。

蔡橋方言における中古全濁声母の無声音化と中古声調の関係は表15から分かる。表15の合計数（855個）はインフォーマント（WSD）が読めた『方言調査字表』（中国社会科学院語言研究所編。1981）

の中古全濁字の数である。その内、有声音子音と発音された583個のうち、舒声字が565個（8割弱）を占めている。一方、無声音子音と発音された272個のうち、入声字が113個（8割強）を占める。

表15 古全濁字の声調と蔡橋方言の有声音・無声音子音の関係

古全濁字	蔡橋方言	有声音	無声音
平・上・去声	724個 (100%)	565 (78%)	159 (22%)
入声	121個 (100%)	18 (15%)	113 (85%)
合計	855個 (100%)	583 (68%)	272 (32%)

ただし、古全濁舒声字には無声音子音として現れるものも存在している(表16参照)。これらは本来、有声音で現れると予測されたが、実際には無声音となっている。その原因は次の2つであると考えられる。一つは、一部の無声音と発音される中古全濁舒声字がそもそも『広韻』で2つの反切を持っていることである。たとえば、“跳^{tʰy¹³}”は「徒聊切，効開四平蕭定」と「他吊切，効開四去嘯透」という2つの反切がある。“挺^{tʰei³¹}”は「徒鼎切，梗開四上迥定」と「他頂切，梗開四上迥透」という2つの反切がある（下線部は中古声母）。もう一つの原因は、“導”、“壽”、“誕”など多くの字が非日常用語である。これらが無声音と発音されたことはおそらく、蔡橋方言における「内的変化」ではなく、北京語などの官話方言からの借用、いわゆる「外的変化」によるものではないかと考える。

表16 蔡橋方言における無声音化された全濁舒声字

中古全濁声母	例字と蔡橋方言の発音
定母 (*d ^h)	導 təw ³¹ , 涛 t ^h əw ⁴⁴ , 艇 t ^h e ⁻³¹ , 誕 tā ²⁴ , 但 tā ²⁴ , 掉 ty ²⁴ , 啼 ti ⁴⁴ , 挺 t ^h ei ³¹
並母 (*b)	髡 pi ²⁴ , 辮 pi ⁴⁴ , 笨 pei ³¹ , 幣 pi ²⁴ , 背 pa ²⁴ , 叛 p ^h u ¹³ , p ^h i ²⁴ , 跑 p ^h əw ³¹
從母 (*ɖ)	贈 tsei ²⁴ , 劑 tsi ²⁴ , 造 t ^h əw ¹³
邪母 (*z)	羨 sye ²⁴ , 遂 suei ²⁴ , 続 su ²⁴ , 袖 sy ²⁴ , 序 t ^h i ¹³
澄母 (*d ^h)	瞪 tei ²⁴ , 仗 tciəŋ ²⁴ , 宙 tcy ²⁴ , 𠵼 tɕ ^h l ²⁴ , 箸 tɕ ^h l ²⁴
崇母 (*t ^h)	撰 tsu ²⁴ , 驟 tsy ²⁴ , 乍 tsə ²⁴
禪母 (*z)	償 ciəŋ ³¹ , 紹 ciəw ²⁴ , 邵 ciəw ²⁴ , 侍 si ²⁴ , 睡 suei ²⁴ , 腎 ɕei ²⁴
群母 (*g)	競 tci ²⁴ , 仅 tci ³¹ , 竟 tci ²⁴ , 芟 t ^h i ¹³ , 柩 tcy ²⁴ , 圈 t ^h ye ⁴⁴
匣母 (*v)	系 ci ²⁴ , 携 ci ²⁴ , 莖 tci ⁴⁴ , 迴 tciəŋ ³¹ , 潰 k ^h uei ¹³ , 艦 kā ²⁴ , 械 ka ²⁴ , 虹 kaŋ ²⁴ , 晃 x ^h u ³¹ , 緩 x ^h u ³¹ , 哄 xəŋ ³¹ , 很 xei ³¹ , 駭 xie ²⁴ , 很 xei ³¹ , 話 ua ⁴⁴

ところで、破裂音、破擦音の場合、無声音化された中古全濁声母が有気音として現れるか、それとも無気音として現れるかは方言によって異なっている。たとえば、北方官話の場合、平声では有気音となり、上声・去声・入声では無気音となっている。一方、贛方言や客家方言の場合、一般に有気音となっている。蔡橋方言においては無声音化された全濁入声字は破裂・破擦音の場合、多数が有気音となっている（表17参照）。

表17 蔡橋方言における無声音化された全濁入声字（破裂・破擦音）

古全濁入声字（破裂・破擦音）	インフォーマントの発音	有気音	無気音
	43個 (100%)	33個 (77%)	10個 (23%)
挙	例	(表18参照)	(表19参照)

表18 蔡橋方言における有気音となった全濁入声字 (破裂・破擦音)

中古全濁声母	例字と蔡橋方言の発音
定母 (*d ^h)	沓 t ^h ɑ ¹³ , 磔 t ^h ie ¹³ , 牒 t ^h ie ¹³ , 谍 t ^h ie ¹³ , 突 t ^h u ⁴⁴ , 特 t ^h ie ¹³ , 笛 t ^h i ¹³ , 狄 t ^h i ¹³
並母 (*b)	拔 p ^h ɑ ⁴⁴ , 白 [p ^h ɑ ¹³], 弼 p ^h i ⁴⁴ , 辟 p ^h i ⁴⁴ , 泊 p ^h o ⁴⁴ , 電 p ^h əu ⁴⁴ , 仆 p ^h u ⁴⁴ , 瀑 p ^h u ⁴⁴
從母 (*ɖ)	族 ts ^h u ¹³ , 嚼 ts ^h ye ¹³ , 捷 t ^h ie ¹³ , 截 ts ^h ie ¹³ , 凿 ts ^h o ¹³
澄母 (*ɖ ^h)	辍 t ^h ie ³¹ , 秩 t ^h ɑ ⁴⁴ , 浊 ts ^h o ¹³ , 泽 ts ^h ie ⁴⁴ , 择 ts ^h ɑ ¹³ , 逐 ts ^h u ⁴⁴ , 轴 t ^h y ⁴⁴
崇母 (*ɖ ^h)	侧 ts ^h ie ¹³
群母 (*g)	及 t ^h i ¹³ , 极 t ^h i ¹³ , 杰 t ^h ie ¹³
匣母 (*ɣ)	洽 t ^h ɑ ¹³

無気音となった全濁入声字は少数ながら存在する (表19参照)。これらの字は殆ど日常生活で使用頻度が低い字であるため、北京語などの官話による影響である可能性が高い。彭建国 (2006) によると、湘方言では中古入声全濁声母が有気音として発音されることは「固有層」であるが、無気音として発音されることは「外来層」(官話方言による影響の結果) であるという。

表19 蔡橋方言における無気音となった古全濁入声字 (破裂・破擦音)

中古全濁声母	例字と蔡橋方言の発音
從母 (*ɖ)	杂 tsa ²⁴ , 集 tsi ²⁴ , 辑 tsi ⁴⁴ , 疾 tsi ⁴⁴ , 藉 tsi ²⁴ , 籍 tsi ²⁴ , 寂 tsi ²⁴
澄母 (*ɖ ^h)	宅 tsie ⁴⁴
崇母 (*ɖ ^h)	闸 tsa ²⁴ , 炸 tsa ²⁴

3. 1. 2 軟口蓋音として現れる中古唇子音

非組声母は中古唇子音のグループである。今日の蔡橋方言では、一部の非組声母が軟口蓋音として現れている (表20参照)。こういった現象は宕撮合口三等韻母の場合に限られている。

表20 蔡橋方言における軟口蓋音となった非組字の発音

中古声母	非母 *f		敷母 *f ^h				
中古韻母	宕撮合口三等 *iwaŋ						
例字	方	放	訪	紡	妨	房	亡
蔡橋方言	x ũ	x ũ	x ũ	x ũ	ɣ ũ	ɣ ũ	ɣ ũ

このような現象は蔡橋方言以外の湘語にも見られる (表21参照)。そのうち、婁底方言は合口三等韻母の場合、非組子音がすべて軟口蓋音となっている。一方、他の湘語は蔡橋方言と同様に、非組声母が軟口蓋音に変化した現象は宕撮の合口三等韻母に限って起こっている。

表21 軟口蓋音となった非組子音をもつ湘方言

中古韻母	止撮合口三等 微韻 *iwaɪ	宕撮合口三等 陽韻 *iwaŋ	魚撮合口三等 虞韻 *iu
例字	飛	訪	符
婁底	xui ⁴⁴	xoŋ ³¹	ɣu ¹³
蔡橋	fi ⁴⁴	x ũ ³¹	ɣu ¹¹
株州	fei ³³	xoŋ ⁴¹	fu ¹³

湘潭	fei ³³	xɔ ⁴¹	fu ¹³
益陽	fei ³³	xɔ ⁴¹	u ¹³

(蔡橋方言以外は鮑厚星 (2006) より引用)

このような変化は非組が幫組から分立する前に起きていたと考える。つまり、非組子音は両唇音から唇歯音への変化を成さず、直接に両唇音から軟口蓋音に変化したと考えられる。なぜなら、両唇音から軟口蓋音への変化は、一部の日本方言(福岡方言)をはじめ、多くの言語に見られる、一種の起こりがちな変化だからである(橋本(1978)参照)。こういった変化が起こり得る理由について、同書は

調音音声学的にみると、両唇音(p)と軟口蓋音(k)とでは、たいへんに遠い、異なった音声であるかのような印象を与えるが、音響音声学的にみると、よく知られているように、両唇音も軟口蓋音も、第2フォルマントが他のフォルマントにぐっとせまっていたいわゆる「暗音」であり、違いと云ったら、前者はフォルマントが全体としてちらばった「散音」であるのに対して、後者は中心にまとまった「密音」である点ぐらいである。

と説明し、「p>k」の変化が起こる音声的条件を次のように述べている(強調点は本稿筆者)。

ここで注意していただきたいのは、p~kの変化や交替に、ほとんどつねに、後続する母音uや半母音wが関与していることである。日本語の「菓子」quaxi~paxi、朝鮮語の「柿の一種」ggwe-yaj : gge-yamにしてしかり；オン・ベエ語baとタイ語のkhaにしても、アンドレ・オードリケールは、これを古代の唇音化軟口蓋音に由来するものであるとしている。

蔡橋方言などの湘語における 両唇音 > 軟口蓋音 の変化は、合口三等(円唇性の介音)の韻母を持つ場合に限られている点から、それらの言語に起きた変化と同様の音声的条件を受け、同質的なものではないかと考えられる。

3. 1. 3 唇歯音として現れる中古軟口蓋音

蔡橋方言では、中古音において軟口蓋音だった疑母(*ŋ)、匣母(*ɣ)、曉母(*x) 声母は、韻母が遇撮合口一等模韻(*u)の場合、唇歯音[v-]、[f-]に変化した。そのうち、疑母子音の唇歯音化はŋ > ɸ > vの経路を辿ったと考えられる。すなわち、まず、子音ŋが脱落して韻母uだけが残された。次に、唇音性母音uの同化を受けて唇歯音vが生じたのではないかと考えられる。一方、匣母、曉母子音はɣ > v, x > fのような経路を経て、それぞれ同じ調音方法をもつ唇歯音に変化した。

[v-] : (疑母*ŋ) 吳vu¹¹, 蜈vu¹¹, 吾vu¹¹, 五vu³¹, 伍vu³¹, 午vu³¹

(匣母*ɣ) 胡vu¹¹, 戶vu¹³, 互vu¹³

[f-] : (曉母*x) 呼fu⁴⁴, 虎, fu³¹, 浒fu³¹, 忽fu⁴⁴

以上のような軟口蓋音の唇歯音化は他に多くの湘方言でも見られる。長沙方言など一部の湘方言では、匣母、曉母子音が中古韻母と関係せず、すべて唇歯音に変化した。

表22 曉組合口子音がすべて唇歯音となった湘方言

中古韻母	灰韻*ui	唐韻*uan	模韻*u
例字	灰	谎	胡
長沙	fei ³³	fan ⁴¹	fu ¹³
衡陽	fei ⁴⁵	fan ³³	fu ¹¹
邵陽	fei ⁵⁵	fu ³¹	fu ¹¹

武岡	fei ⁴⁴	fan ³¹	vu ¹¹
城歩	fei ⁵⁵	fan ³¹	vu ¹¹

(鮑厚星 (2006) より引用)

一方、蔡橋方言を含め、もう一方の湘方言では、曉組子音の唇齒音化は一部の韻母に限られて起こっている (表23参照)。

表23を通して、湘方言における曉組子音の唇齒音化過程と韻母の関係もうかがえる。すなわち、軟口蓋音だった曉組子音は模韻 > 灰韻 > 唐韻 という順で、唇齒音に変化してきたことである。そのうち、模韻字は単母音韻母であったため、変化が最も先に起きた。一方、唐韻字は鼻音韻尾を持ったため、変化が最も遅れている。蔡橋方言の場合、模韻では唇齒音化が起こったが、灰韻、唐韻では起こっていない。したがって、蔡橋方言の曉組子音の唇齒音化は婁底方言より進んでいるが、株州、湘潭、益陽方言より遅れていることが分かった。

表23 曉組子音が軟口蓋音として現れる湘方言

中古韻母	灰韻 *uvi	唐韻 *uarj	模韻 *u
例字	灰	谎	胡
婁底	xue ⁴⁴	xɔŋ ⁴²	vu ¹³
蔡橋	xuei ⁴⁴	xu ⁴²	vu ¹¹
溆浦	huei ⁴⁴	hua ³³	fu ¹³ /u ¹³
株州	fei ³³	xɔŋ ⁴¹	fu ¹³
湘潭	fei ³³	xɔ ⁴¹	fu ¹³
益陽	fei ³³	xɔ ⁴¹	u ¹³

(蔡橋方言以外は鮑厚星 (2006) より引用)

3. 1. 4 尖音と団音の区分

中古音では精組声母と見系声母は後続母音が狭母音iの場合、互いに区別することができた。こういった区別は「尖音と団音の区分」^[185]とよばれる。北京語の場合、尖音と団音の区分は18世紀頃までであったが、それ以降、口蓋化が起こってしまい、両者は19世紀の初めの頃、舌面音 [t̪, t̪ʰ, ɕ] へと合流した。

蔡橋方言の場合、尖音と団音の区分はなお保たれている。蔡橋方言では精組子音が舌面音化されおらず、舌尖音として現れている。そのため、蔡橋方言における尖音と団音の区分は見系子音の舌面音化の有無によって、2つのパターンに分けられる。一つは見系子音が舌面音化されており、舌尖音の精組子音と区別するパターンである (表24参照)。もう一つは、見系子音が舌根音を保ったままの形で舌尖音の精組子音と区別するパターンである (表25参照)。

表24 蔡橋方言における「尖音と団音の区分」(パターン I)

中古声母	精 組	見 系	精 組	見系	精 組	見 系	精 組	見系	精 組	見系	精 組	見 系
例字	节	结	齐	旗	酒	九	习	戕	西	希	泻	协
蔡橋方言	tsie	ɕie	dzi	ɕi	tsy	ɕy	si	ɕi	si	ɕi	sie	ɕie
北京語	ɕie	ɕie	ɕʰi	ɕʰi	ʰɕiou	ʰɕiou	ɕei	ɕi ^ɰ	ɕei	ɕei	ɕie ^ɰ	ɕie

(本稿の北京語データは北京大学1985より引用)

表25 蔡橋方言における「尖音と団音の区分」(パターンⅡ)

中古声母	精 組	見 系	精 組	見 系	精 組	見 系	精 組	見 系	精 組	見 系	精 組	見 系
例字	焦	钩	走	狗	酒	够	秋	扱	锹	丘	湊	口
蔡橋方言	tsy	ky	tsy	ky	sy	ky	ʰy	kʰy	ʰy	kʰy	ʰy	kʰy
北京語	tɕiaʊ	əkou	ʰsou	ʰkou	tɕiou	kou ^ɔ	tɕʰiou	tɕʰou	tɕʰiau	tɕʰiou	ʰou ^ɔ	ʰou

3. 2 韻母の変化

本節では音節構成成分のうち、韻母の部分を実験の対象として取り上げる。『広韻』では、韻母は韻尾が共通で主母音が近いか同じであるといった原則に沿って、大きく16のグループに分けられている。すなわち「十六撰」と呼ばれるものである。十六撰のうち、果撰、仮撰、蟹撰、効撰、流撰、遇撰、止撰はゼロ韻尾、もしくは母音韻尾を持つ開音節韻母のグループである。一方、咸撰、深撰、山撰、臻撰、宕撰、梗撰、江撰、通撰はいずれも子音韻尾 (-n/-m/-ŋ/-p/-t/-k) を持つ韻母のグループである。

表26 十六撰

開口度	広い	果撰・仮撰	蟹撰	効撰	咸撰	山撰	宕撰・梗撰	江撰
	狭い	遇撰	止撰	流撰	深撰	臻撰	曾撰	通撰
韻尾	舒声の場合	なし	-i	-u	-m	-n	-ŋ	-ŋ
	入声の場合	/	/	/	-p	-t	-k	-k

(「なし」は韻尾を持たないことをあらわす。「/」は当該の撰が入声を持たないことを表す。)

開音節韻母における母音の変化については王振宇(2009)を参照されたい。ここでは中古鼻音韻尾に起きた主母音の高舌化や鼻音韻尾の弱化などの変化(3.2.1節)、および「陰陽入対転」という音韻変化(3.2.2節)を取り上げることにする。

3. 2. 1 鼻音韻母における主母音の高舌化と鼻音韻尾の弱化

中古音で鼻音韻尾を持っていた諸撰は蔡橋方言において、①鼻音韻尾、②鼻母音、③開音節といった3つの音声形式として現れている。

表27 蔡橋方言と中古鼻音韻母の対応関係

中古鼻音韻母	蔡橋方言		
梗撰(白話音) 宕撰・江撰開口(非唇子音)	*eŋ, iɛŋ, weŋ, iwɛŋ, æŋ, wæŋ, iɛŋ, iwɛŋ, iɛŋ, iwɛŋ *iaŋ, aŋ, ɔŋ	-aŋ/-iaŋ	①
通撰	*uŋ, iuŋ, uoŋ, iwɔŋ	-əŋ/-iəŋ	
咸撰開口一・二等 山撰合口三等(唇子音)	*ɔm, am, ɐm, am *uaŋ, waŋ, wæŋ	-ã	②
咸撰開口三・四等 山撰開口三・四等	*iɛm, iɛm *ien, iɛn	-ĩ	
山撰合口一・二等 宕撰・江撰開口(唇子音)、宕撰合口	*uaŋ, waŋ, wæŋ *iaŋ, aŋ, ɔŋ/*iwaŋ, uaŋ	-ũ	

深摂	*iěm		
臻摂	*ən, uən, ien, iwən, iən, iuən, iěn, iuěn, iwěn	-ei/-iei/-yei	③
曾摂開口一・三等	*əŋ, iəŋ		
梗摂 (文言音)	*eŋ, iəŋ, wəŋ, iwəŋ, æŋ, iɛŋ, iwɛŋ, iɛŋ, iwɛŋ		
山摂合口三・四等 (非唇子音)、開口三等 (一部)	*wan, wæn, iwen, iwən, ien, iɛn	-ye	

中古鼻音韻母から現代蔡橋方言までの変化の中には、次のような大きな特徴が観察される。

a. 主母音の高舌化

多くの中古鼻音韻母では母音の高舌化が起きている。変化の誘因としては以下の2つが考えられる。一つは中古音による影響である。たとえば、咸摂、山摂、宕摂、江摂などの場合は、中古音で介音を持たない開口一・二等韻の場合、ほとんど広・低母音のままであるが、一方、介音 -i- を持つ開口三・四等韻では介音の同化を受けて [i] と高舌化された。また、介音 -u- を持つ合口一・二等韻においても同じく介音の同化により [u] と高舌化された。もう一つは中古韻尾による影響である。たとえば、曾摂、梗摂では、中古韻尾が前寄りの [ŋ] であるため、それに先行する主母音が低・広母音から高い舌位に変わったのである。すなわち、*aŋ > *aɪ > *aiŋ > eŋ のような変化である。

b. 鼻音韻尾の弱化

鼻音韻尾の弱化は漢語方言において広範に見られる現象であり、中古鼻音韻尾の変化の傾向でもある。たとえば、現代北京官話では -m が -n に合流し、-n と -ŋ の2種類の鼻音韻尾が存在する。呉方言では変化がより進んでおり、-ŋ という1種類の鼻音韻尾しかない。

蔡橋方言では鼻音韻尾 [-n, -m, -ŋ] の多くは鼻母音、開音節と弱化されている。その弱化の度合いは中古韻母の開口、すなわち、介音の有無や種類により大きく影響されている。たとえば、咸摂、山摂の鼻音韻尾は鼻母音、もしくは開音節と弱化している。その弱化の度合いも中古音の介音と関係している。山摂合口三・四等の場合は中古音で -y- 介音を持っており、開口が最も狭い。そのため、鼻音韻尾の変化が最も進んでおり、開音節韻母となっている。その他の場合はいずれも鼻母音と変わっている (表27参照)。

ちなみに、蔡橋郷周辺一部の地点、たとえば岩口舗鎮、塘田市鎮の方言^[註6]では、合口三・四等のみならず、山摂韻母のすべてが鼻音韻尾を落として開音節母音となっており、蔡橋方言より一歩進んだ変化を遂げている。

表28 岩口舗鎮、塘田市鎮方言における山摂字の発音

開合 等位	開口				合口				
	一等	二等		三等	四等	一等	二等	三等	四等
韻母	寒韻 *an	山韻 *æn	刪韻 *an	仙韻 *iɛn	先韻 *ien	桓韻 *uan	刪韻 *wan	仙韻 *iwen	先韻 *iwen
例字	炭	山	顔	煎	田	短	関	船	県
岩口舗鎮	t ^h a	sa	ŋa	ɬie	die	tua	kua	ɬye	zye
塘田市鎮	t ^h a	sa	ŋa	ɬie	die	tua	kua	ɬye	zye

表29 岩口舗鎮、塘田市鎮方言における咸攝字の発音

等位	一等		二等		三等		四等
韻母	覃韻 *ɔm	談韻 *ɔm	咸韻 *ɛm	銜韻 *am	塩韻 *ɿɛm	嚴韻 *ɿɛm	添韻 *iem
例字	含	敢	咸	衫	尖	欠	甜
岩口舗鎮	vo	kua	vo	sa	tɕie	tɕ ^{hi} ie	die
塘田市鎮	va	ka	va	sa	tɕie	tɕ ^{hi} ie	die

3. 2. 2 蔡橋方言における「陰陽入対転」

前節では、鼻音韻が韻尾を落として開音節韻になった音韻変化を見た。本節ではそれとまったく逆の音韻変化、すなわち、開音節韻などの非鼻音韻が鼻音韻に変わるという現象について見てみる。

中国の伝統的な音韻学では、韻尾の特徴により韻母が3種類に分けられている。ゼロ韻尾や-i, -uでおわる韻母は「陰声調」、鼻音韻尾でおわる韻母は「陽声調」、子音韻尾-p, -t, -kでおわる韻母は「入声調」とそれぞれ名づけられる。これらの韻母は相対応する組をなしており、ある条件の下で互いに变化する。これは「陰陽入対転」と呼ばれる。こういった現象は蔡橋方言において少なからず存在している。

まず、中古音で「陰声調」（開音節）だった韻母が「陽声調」（鼻音韻母）に変わる例は表30、表31の通りである。

表30 蔡橋方言における鼻母音となった中古開音節字

例字	中古声母	中古韻母	推定音価	蔡橋方言
米	明母	蟹開四齊	*miei	mē
迷	明母	蟹開四齊	*miei	mē
謎	明母	蟹開四霽	*miei	mē
眉	明母	止開三脂	*mi	mē

表31 蔡橋方言における鼻音韻尾となった中古開音節字

例字	中古声母	中古韻母	推定音価	蔡橋方言
模	明母	遇合一模	*mu	məŋ
暮	明母	遇合一暮	*mu	məŋ
募	明母	遇合一暮	*mu	məŋ
母	明母	流開一厚	*məu	məŋ
扭	泥母	流開三有	*niəu	iəŋ
牛	疑母	流開三尤	*ŋiəu	ŋiəŋ

このような現象は、現代音声学の原理で「同化」と解釈することが可能だと考える。「同化」とはある音が開音節における他の音を自らと同じ素性の音に変化させることをさす。前の音が次の音と同化する場合は「順行同化」と、逆の場合は「逆行同化」とよばれる。うえの変化に共通するところは、いずれも中古音の声母が鼻音であることである。声母の鼻音性子音 [m/ŋ] に同化され、開音節だった韻母が鼻母音や鼻音になっている、といった「順行同化」が起こっていると考えられる。次のような変化の経路があると考えられる。

表30の変化: *miei > mien > men > me^ˊ

表31の変化: *mu > mäu > mən

*mäu > mən

ところで、表30の字は鼻母音になり、鼻音 [ŋ] にならなかった。一方、表31の字は鼻音 [ŋ] になっているが、鼻母音にならなかった。これはなぜだろうか。その原因は [i] と [n], [u] と [ŋ] の関係にあると考えられる。菊田 (1967) によると、それぞれの対には次のような「親縁的な関係」があるという。

/i/ は前舌面がもちあがって調音され、韻尾の /n/ は前舌面が硬口蓋全部に接している。それに対して、/u/ は舌根を軟口蓋に近づけて調音し、/ŋ/ は舌根が軟口蓋後部に接している。

音韻変化は一般に発音部位が近い音の間に起こりやすい。したがって、[i] 韻尾の字は (最初は鼻音 [n], 次は) 鼻母音に、[u] 韻尾の字は鼻音 [ŋ] に変化する、という可能性が高いと考えられる。

そして、中古音で「入声調」(-p,-t,-k 韻尾) だった韻母が「陽声調」(鼻音韻母) に変じる現象も見られる。表32のように、-kでおわる中古入声字の一部は蔡橋方言で鼻音韻 [-ŋ] になっている。ここで働く原理は前述されたのと同じであり、入声韻尾-kは鼻音声母による「同化」を受け、同じ軟口蓋音の [-ŋ] に変化した、というものである。

表32 蔡橋方言における鼻音韻母となった中古入声字

例字	中古声母	中古韻母	推定音価	蔡橋方言
肉	日母	通合三屋	*nzɿuk	nɿəŋ ⁴⁴
幕	明母	宕開一铎	*mak	məŋ ⁴⁴
木	明母	通合一屋	*muk	məŋ ⁴⁴
目	明母	通合三屋	*mɿuk	məŋ ⁴⁴

3. 3 声調の変化

中古漢語は平声、上声、去声、入声という4種の声調を有する。これに対して、現代漢語の声調数は方言によって4つから9つまで大きく相違している。ただし、いずれも中古の声調が元となり、それらが分化、併合した結果と考えられる。蔡橋方言には陰平、陽平、上声、陰去、陽去という5種の調類があり、それぞれの調値が44、11、31、24、13である。以下は中古の四声と蔡橋方言の対応関係を見ていく。

中古の平声はほとんど声母の清濁によって、陽平、陰平と分かれる。すなわち、中古の平声は全清、次清声母場合、今日蔡橋方言で陰平と発音される。一方、次濁、全濁声母の場合は陽平と発音される。

表33 古平声と蔡橋声調の対応関係

中古声母	全清	次清	全濁	次濁
蔡橋声調	陰平		陽平	

漢語諸方言では4つの中古声調のうち、上声の変化が最も早い段階に起きたとされている。また、全濁声母の場合は他の声母の場合より変化が先に起きた。その理由は全濁声母が低く発音されるのに対して、上声が高い音高を持っている。両者は相容れにくいので、組み合わせが最も早く崩れたのである (辛世彪 (2004) : 潘悟云による序参照)。

全清、次清、次濁の上声字は、蔡橋方言ではほとんど上声として保持されている。全濁上声の場合は一部が陽去に変じ、一部が上声としてなお保たれている。

表34 古上声と蔡橋声調の対応関係

中古声母	全清	次清	次濁	全濁
蔡橋声調	上声			陽去、上声

中古全濁上声字が上声として保持されることは現代漢語方言で非常に稀な現象である。ここでは参考までに、隣の邵陽方言の例を挙げておく。表35に挙げられている中古全濁上声字は、邵陽方言でほとんど陽去（13）に変わっている。

表35 蔡橋方言、邵陽方言における全濁上声字の発音

声母	並母		定母		從母		澄母		禪母		群母		匣母	
	*b ^h		*d ^h		*ɬ ^h		*ɟ ^h		*z		*g ^h		*ɣ	
例字	被	笨	淡	动	在	坐	重	柱	上	竖	近	咬	后	厚
蔡橋	bi ³¹	bei ³¹	dā ³¹	dəŋ ³¹	ɬa ³¹	ɬo ³¹	ɬiəŋ ³¹	dʒl ³¹	zaŋ ³¹	dʒl ³¹	ɬiei ³¹	gəw ³¹	zy ³¹	zy ³¹
邵陽	bei ¹³	pe ²⁴	dā ¹³	doŋ ¹³	dza ¹³	ɬo ¹³	ɬoŋ ¹³	ɬy ¹³	zā ¹³	zy ¹³	ɬi ¹³	ŋau ¹³	vəw ¹³	vəw ¹³

（邵陽方言は儲澤祥（1998）より引用）

中古の去声は蔡橋方言において、殆どの場合で陰去、陽去として現れている。分化の条件は今日の蔡橋方言の頭子音である。すなわち、有声音、有気音子音の場合では陽去となり、無声音子音の場合では陰去となる。

表36 古去声と蔡橋声調の対応関係

中古声母	全清	次清	次濁	全濁
蔡橋声調	多数	陰去	陽去	陰去
	少数	陽去、陰平	陰去	陰平、陽去

また、中古全清と次濁、次清と全濁がそれぞれ同じ変化傾向を示す。そのうち、次濁声母の場合、一部の古去声が陰平となっていることは特徴的であり、その例字をすべてここに挙げておこう。

[次濁去声→陰平] 慢 mā⁴⁴、面 mi⁴⁴、帽 məw⁴⁴、庙 my⁴⁴、夢 məŋ⁴⁴、罵 ma⁴⁴、命 miəŋ⁴⁴、院 ye⁴⁴、様 iaŋ⁴⁴、餓 ŋo⁴⁴、驗 i⁴⁴、右 y⁴⁴、用 iəŋ⁴⁴、夜 id⁴⁴、芋 z⁴⁴、裕 z⁴⁴、運 yei⁴⁴、爛 nā⁴⁴、乱 lā⁴⁴、利 li⁴⁴、釀 iaŋ⁴⁴、念 i⁴⁴、尿 iəw⁴⁴、料 ly⁴⁴、漏 ly⁴⁴、路 lu⁴⁴、慮 li⁴⁴、二 e⁴⁴

中古音の4つの声調のうち、入声は他の声調と違って短促を主要な特徴とし、内破音韻尾 -p, -t, -k でおわる特有の声調である（平山（1967）参照）。中古の入声は蔡橋方言で独立した声調として存在しておらず、全清、次清声母の場合はほとんど陰平に、全濁、次濁声母の場合では殆ど陰去にそれぞれ分配されている（表37参照）。

表37 古入声と蔡橋声調の対応関係

中古声母	全清	次清	次濁	全濁
蔡橋声調	多数	陰平		陰去
	少数	陰去	陽去	陽去、陰平

以下、例字を挙げながら、具体的に見ていくことにする。

まず、中古入声は全清、次清声母の場合、今日の蔡橋方言でほとんど陰平となっている。

[全清入声字] 東 su⁴⁴、哲 tɕie⁴⁴、積 tɕi⁴⁴、惜 si⁴⁴、割 ko⁴⁴、八 pa⁴⁴、殺 sa⁴⁴、節 tɕie⁴⁴、結 tɕie⁴⁴、刷 sa⁴⁴、発 fa⁴⁴、雪 sye⁴⁴

[次清入声字] 触 t^hu⁴⁴、鉄 t^hie⁴⁴、切 t^hie⁴⁴、脱 to⁴⁴、血 cye⁴⁴、確 k^ho⁴⁴、錯 t^ho⁴⁴、却 t^hio⁴⁴、塔 t^ha⁴⁴、挿 t^ha⁴⁴、客 k^ha⁴⁴、赤 t^hia⁴⁴、尺 t^hia⁴⁴、出 tɕ^hɿ⁴⁴

次に、中古全濁入声は殆ど^[注7]陰去、陽去となっている。そして、陰去と陽去の分化の条件は今日の蔡橋方言の子音の調音方法である。すなわち、無気音子音の場合は陰去、有気音子音、有声音子音の場合は陽去となっている。

[陰去となっている全濁入声字]

舌 cie²⁴、奪 to²⁴、活 xo²⁴、罰 fa²⁴、学 cio²⁴、盒 xo²⁴、涉 eie²⁴、乏 fa²⁴、集 tɕi²⁴、習 si²⁴、十 sɿ²⁴、食 sɿ²⁴、実 sɿ²⁴

[陽去となっている全濁入声字]

別 bie¹³、滑 vu¹³、傑 t^hie¹³、絶 tɕye¹³、濁 t^ho¹³、薄 bo¹³、昨 tɕo¹³、暈 di¹³、読 du¹³、族 t^hu¹³、白 p^ha¹³、澤 t^hie¹³、射 za¹³、笛 t^hi¹³、及 t^hi¹³、特 t^hie¹³、賊 tɕie¹³、直 dzɿ¹³、極 t^hi¹³、侄 dzɿ¹³

最後に、中古次濁入声字は一部が陰平、もう一部が陽去となっている。分化の条件は現在不明である。

[陰平となった次濁入声字]

月 ye⁴⁴、幕 məŋ⁴⁴、寞 məŋ⁴⁴、略 lio⁴⁴、墨 mie⁴⁴、抹 mo⁴⁴、越 ye⁴⁴、閱 ye⁴⁴、蠟 la⁴⁴、木 məŋ⁴⁴、鹿 lu⁴⁴、肉 niəŋ⁴⁴、緑 lu⁴⁴、粒 li⁴⁴、日 ŋ⁴⁴、律 li⁴⁴

[陰去となった次濁入声字]

玉 zɿ²⁴、獄 zɿ²⁴、欲 zɿ²⁴、末 mo²⁴、岳 io²⁴、莫 mo²⁴、落 lo²⁴、葯 io²⁴、叶 ie²⁴、六 ly²⁴、育 zɿ²⁴、麦 ma²⁴、歴 li²⁴、力 li²⁴、密 mi²⁴、栗 li²⁴、熱 ni²⁴

4. 今後の課題

以上、蔡橋方言の音韻的な特徴を明らかにするために、共時的、通時的という2つの側面から考察を進めてきた。ただし、本稿には不足なところも多々存在している。たとえば、蔡橋方言の有尾韻を { i, u : ŋ } のような対の体系と解釈している。ところが、北京語、蘇州語、広東語の有尾韻は平山 (1980) により、それぞれが対 { j : n ; w : ŋ }、対 { n : · }、対 { p : m ; t : n ; k : ŋ } の体系として捉えられている。このような合理的かつ整然たる音韻体系を得るために、蔡橋方言について音韻論的解釈を如何に改善すれば良いかなどの問題は今後の課題である。

注

- 1 本節にあげたデータは特にことわらない限り、「邵陽県志 (1978~2002) 送審稿」によるものである。
- 2 「片」は下位グループのことであり、「小片」は「片」のさらなる下位分類である。
- 3 『広韻』に基づき、中古漢音の音価の再構築について、多くの先行研究が行われている。ただし、諸説の間には相違点が多々存在している。本稿では特にことわらない限り、王力 (1980) の推定音価による。
- 4 中古音には平声・上声・去声・入声という4種類の声調があったと推定される。このうち、平声・上声・去声がまとめて舒声と呼ばれる。
- 5 「尖音」と「团音」の名称の由来について藤堂 (1960) は次のように述べている。「…それは満州文字で書いたばあいに、ts, ts^h, sなどは頭の尖った文字で書かれ、これに対して、k, k^h, hなどは頭の丸い文字でかかれる所から起ったものであろう。」

- 6 両地点の方言データは筆者が2008年2月に行った調査で得たものである。
7 “鐸tsu⁴⁴”、“逐tsu⁴⁴”、“轴tsu⁴⁴”といった3つの例外がある。

参考文献

- 鲍厚星・陈晖（2005）「湘語的分区（稿）」、『方言』第3期。
鲍厚星（2006）『湘方言概要』，湖南师范大学出版社。
北京大学中国语言文学系语言学教研室编（1985）『汉语方言字汇（第二版）』。文字改革出版社。
储泽祥（1998）『邵阳方言研究』。湖南教育出版社。
彭建国（2006）『湘語音韵历史层次研究』。上海师范大学博士学位论文。
邵阳县人民政府・中共邵陽县委（2006）『邵陽県統計年鑑・2006』。
邵阳县志编纂委员会编（1993）『邵阳县志』。社会科学文献出版社出版。
邵阳县志编纂委员会编（2002）（未出版）。『邵阳县志（1978-2002）送审稿』。
辛世彪（2004）『东南方言声调比较研究』。上海教育出版社。
王力（1980）『汉语史稿』。中华书局。
王振宇（2009）「蔡橋方言における母音の変遷について」『地域政策科学研究』6号。鹿児島大学人文社会科学研究科。
张光宇（1999）「东南方言关系综论」、『方言』第1期。
牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編（1967）『中国文化叢書1 言語』。大修館書店。
河野六郎（1979）「朝鮮漢字音の研究」、『河野六郎著作集2（中国音韻学論文集）』。平凡社。
菊田正信（1967）「現代語の音韻」。牛島徳次ほか編『中国文化叢書1 言語 II -4』。
橋本萬太郎（1978）『言語類型地理論』。弘文堂。
藤堂明保（1960）「ki-とtsi-混同は18世紀に始まる」、『藤堂明保中国語学論集』。汲古書院。
平山久雄（1967）「中古漢語の音韻」。牛島徳次ほか編『中国文化叢書1 言語 II -3』。
平山久雄（1980）『中国語音韻論——その歴史的研究——』。光生館。